

ある日の草野大悟 その二

—あの「ピヨピヨ」の声はもう聞こえない—

曾根量幸（4組）



一九八〇年六月十二日の小田急ハルクの会場は人、人であふれていた。普段、映画やテレビ、舞台でしか見るのでできない俳優や芸能関係者たちが、一般の人達と同じフロアーにブラブラといた。

「草野大悟の出版を祝う会」の為に駆けつけた人達だった。大悟の書いた「同志！ 僕に冷たいビールをくれ」という本が紀伊国屋書店でベストセラーになったという。

勝新太郎、佐藤慶、浜田光夫、藤村有弘、鶴田忍、吉田日出子、藤田弓子など。樹木希林はどこに居るか分からなかった。その他、名前を思い出せない役者など、それはそれは華やかだった。中でも勝新は大スターだけあって、人だかりが途切れることなく続いていた。佐藤慶は、若者かと思紛うようなピンクの綿パンツに白とピンクの格子柄シャツを上手に着こなしていた。

最初に舞台上に呼ばれたのは、大悟の友人でハーフの美人ダンサーだった。彼女が祝辞を述べると大悟はうやうやしく頭を下げた。司会の岸田森が本をかざして紹介した。大悟の玉龍時代の担任だった北見先生（東海大学教授）も挨拶をされたが、若い日の先生の面影をいっばい残していらして懐かしかった。

スーツをピシッと決めた浜田光夫もコーラスをバックに歌った。ピンクのパンツルックの佐藤慶は、シブい低音がよく響いて素敵だった。大悟夫妻を前にして「愛の賛歌」を歌った勝新は、艶のある低音で重みがあった。大悟は大層感激している様子だった。

とりわけ会場が賑やかに盛り上がったのは、大悟が行きつけの新宿のバーのママの弾き語りだった。着物姿で椅子に腰



腰かけ、ギターを抱えたママは、女性三人をコーラスに従えて唄い出した。ユーモラスでエロチックな歌詞が次々と続き、途中で「ピヨピヨッ！」のかけ声が入ると、その度に会場はクスクスと笑い声に包まれた。バックにいる司会の岸田森などもずっと笑っていた。

大悟はウイスキーグラスを片手に、愉しげにリズムに乗っていた。ママがすました顔で唄い続けるものだから思わず吹き出しそうになった。役者顔負けのいや、歌手顔負けのユニークな弾き語りだった。

このママに後に私が二度も会うことになるうとは、夢想だにしなかった。あれから数年後、鹿児島から上京した本田ルミ子さんと私を連れて、大悟が新宿なん丁目かのお店へ連れて行ってくれた。店の名前は「ピヨピヨ」。うなぎの寝床をふくらましたようなこじんまりした店だった。

そこへあの弾き語りのママが着物姿で迎えてくれた。思いがけない久しぶりの再会で私はとても嬉しかった。

挨拶を交わし、ひとしきり雑談が終わると、ママはギターを取り、抱えた。店内はやや薄暗く、時間帯のせいか他の客は見当たらなかった。

大悟は店の奥の方の椅子にモタレティタ。ルミ子さんと私はママの側で聴くことに。やがてあのユーモラスでエロチックな弾き語りが始まった。

まもなくすると突然「ピヨピヨッ！」大悟の声が店内になり響いた。と同時に仰向けの体がとび跳ねた。「ピヨピヨッ」の度に歌いながら跳ねた。なんども何度も。

あんなに子供のようになり楽しそうにくつろいでいる大悟を見たのは初めてだった。まごころのような時間がゆっくり流れている感じ不思議な光景だった。

お店を出る時、ルミ子さんがママに挨拶をした。

「これから大悟を、草野大悟をよろしくお願ひします」と深々とお辞儀をした。



時代は大きく変わって二〇一〇年十二月、銀座で八期忘年会の帰りに、私はN君とS君の三人で交通会館そばの喫茶店のカウンターにいた。そこでたまたま新宿のバー「ピヨピヨ」の話が出た。



「あそこへ行ったの？」とN君。N君は大悟の初期の舞台から紀伊国屋ホール等で見ている人だ。

「そう、大悟に連れて行かれたの」

ママの弾き語りで大悟が楽しそうにしていたことなど、そして帰りにルミ子さんが「これからも大悟をよろしくお願ひします」と深々とお辞儀をしたことなどを話した。そして「あんな挨拶は、私には出来そうにないな」と云った。

するとN君が「挨拶するのは、あっちの方じゃない」といわくありげな顔で云った。

「ええっ、どういふこと？」私の頭の中が混乱した。

「二人のこと、気づかなかったんだ君は」しばしの沈黙がふたりを包んだ。わたしは静かに眼を閉じて脳内暦を光速で過去へ戻した。すぐ二十数年前のあの時の不思議な光景が思い出された。

「なるほど、そういう事だったんだ」ピヨピヨの声が一瞬間こえた気がした。

—あの時の大悟は、至福の時を過ごしていた—のだったのかも。

《天国の大悟へ》

野球の江本猛紀をゲストに招いた、池袋のサンシャイン劇場での「くたばれヤンキース」（一九八五年十二月）。大悟が舞台の前方へきて、ひとり長科白をしやべる場面がありましたね。すると、あなたは急に途中からセリフのイントネーションが変わりましたね。

「あれっ、おかしい」—ほんの五、六秒の間でした—明らかにそれは、鹿児島島のそれでした。前から三番目の席にいた私は、ほんの一瞬でしたが目の前にいたあなたの顔を見上げました。でも、あなたは何事もな



八期通信アーカイブス

2003年 第9号 東川 敏治（1組）



私は、さる七月十二日（土）梅雨空の蒸し暑いさなか、東京駅に近い八重洲富士屋ホテルで開催された、玉龍八期会なる同窓会に出席致しました。四十五周年の節目の記念大会だということを知らずに、卒業後、初めての出席でした。

会場では受付嬢？に「何組ですか」と聞かれ、自分の組も咄嗟には思い出せず、いきなりカウンターパンチを食らった幕開けでした。

今回は、五組の皆さんが担当幹事とのことで、古市君が手馴れた様子で総合司会を勤めていました。幹事の皆さんの自己紹介の時、久永君が「五組で席順二十三番でした」と、事も無げに答えていましたが、彼の記憶力に驚くと共に、自分の組さえ忘却の彼方とは、言語道断と反省するのみでした。

暫くして、私と同じ組の西山君との出会いで、突然昔のことが蘇ってきました。当然、お互いに、剣道部に所属していたのですが、めっぽう腕が強く、負けず嫌いの西山君と何回もお手合わせをしたのですが、剣道と云うよりチャンバラに近い果し合いで、筆手はずした二の腕や胴を外れた脇腹を竹刀でたたか叩かれて、ミミズ腫れになったことをなぜか唐突に思い出しました。

それにしても、西山君は、当時の面影をそこはかたなく残しながら且つスマートで、物静かな風貌は、なぜか三年B組の金八先生を髣髴させるに十分でした。

この度の同窓会に出席してみようかな、と思い立ち、ボンと背中を押して下さったのが、幹事の吉村弘子女史と森繁君でした。私は吉村さんのことをあまり覚えていなかったので、下池和彦君に彼女のプロフィールを問い合わせたところ「当時、清水小の竹ノ内ヒーチャンと言えば知らん人はいない、幼い時は（コメトキャ）ムソカッタガネ、今度会ったときは宜しく伝えてくれ」と伝言まで頼まれてしまった。

かったようにセリフをしゃべり続けていましたね。

もしかしたらあれは、さつまおこじょへのサービスだったのかも知れませんか。

あの辺りは舞台からよく見える処ですから。

これまでたくさんの夢と未知の世界をありがとうございました。そして時折みせる細やかな心遣いも忘れません。

あなたの亡き後、遺されたひと束のメモが本になりました。一九九二年二月二十七日、草野大悟「俳優論」出版記念会の会場には、あの新宿の「ピヨピヨ」のママが着物姿で見えてましたよ。



大悟のピヨピヨの声を聞きたくなったのでしよう。ふたりだけの。はやいもので、来年二月二十七日はあなたの二十四回忌が来ます。「光陰矢のごとし」とはよく言ったものですね。